二、附屬医專の部

丘に立ちて

――原爆体験記――

長井道郎

烈！　昭和廿年八月九日午前十一時二分。

日本の悲劇に終幕を告げる第二号原子爆弾は長崎上空五〇〇米に炸烈し、長崎医科大学は教授の⅔、看護婦、学生の大半を瞬時に失い、その偉容を誇つた白堊の医学殿堂は全機能を喪失してしまつたのである。

それから、十年間の歳月は過ぎ、今感慨も新たに十周年を迎えんとしている。

今、静かに、まぶたを閉じ、十年以前を回顧し、その記憶をたどつて惨々たる様相を綴り、今後未来永劫に亘て、再び斯くの如き、集団殺戮の行われざる様、世界の平和を希望して止まない。

一、その日

吾々医専三年生は、繰上げ卒業試験第三週に入り、七乃至八名のグループに別れ各科に配属されていた。その日、早朝より空襲警報は発令されていたが、間もなく解除され、警戒警報下に医療隊本部では敵機の情報を検討した結果、待避を解き、夫々各学年共、講義に入る様指令したのが、午前十時頃だつた。緊張から解放された学生は、各自教室や、各科へ散り本来の学生生活へ帰つたのである。

私も、医療隊本部（本館）より影浦内科へホツとした気持で引上げた。そして堤、永田、中島、琴尾、田尻の級友と共に、緊張のほぐれた一種の虚脱感から来る空つぽな愉快さをぶちまきながら、内科一階廊下に入り、鉄カブトを取り、防毒マスクを外して二階影浦内科学生控室に入つた。

翌十日は愈々内科の卒業試験と云うので皆参考書をひろげ、試験問題のやまかけに大童。あれでもない、之でもないと騒ぎ乍ら、学生特有の時間前の昼食をひろげる者さえあつて、いつもの変てつもない学生生活に返つて行きつゝあつた。

丁度十一時をすぎたかな！と思う頃である。一瞬、直撃弾を受けたと思われる様な爆発音と無気味な青みがゝつた閃光と共に、吾々の体は嫌と云う程、南側壁にぶちつけられていた。

同時に天井は落下し、級友や二、三人の看護婦はその下敷となつてしまつた。

二、三十分間も続いたであろうか、爆発音もなくなり一瞬此の世のも

のとも思えぬ様な静寂が、吾々を支配した。

私は、その静寂の中から耐えきれなくなり、只当もなく、誰を呼ぶでもなく、「オーイ」と二回大声をあげてみた。

すると、すぐ控室の横の廊下附近から「オーイ」と云う返事があつた。堤君の声の様だ。私はそう思うと、「堤」と呼んでみた。するとすぐ「長井か」と応答があり、お互い無傷であることを大声で知らせ合い、体を覆つているものを押しのけて走りより手を握り合つた。逃げようと思つて、本館へ通ずる廊下をゴミだらけの真暗な中で、手さぐりで探しびつくりした。廊下は無残にも後型もなく、押しつぶされていてないのだ。私は堤と一階から出ることにし、一階へ通ずる階段を下りようとして又びつくりした。

病室からは、傷だらけの患者が這い出し、廊下にうごめいているし、看護婦達も、動けない様な者ばかりである。

窓硝子は一枚余さず破れてしまつていて、北側の窓は皆内側にへし曲つている。

その窓から見える空は、もう〳〵たるゴミで夜のように暗く、而もゴウ〳〵と唸つて、渦を巻いているのだ。

その時初めて私は、つい前日の大詔奉戴日に角尾学長から聞かされた広島の新型爆弾を思い出し、戦慄を覚えた。

私は一階へ駈け下りた。そして本館西角を曲つて二度びつくりした。大学から見渡される坂本町、岩川町一帯は全面火の海と化し、その熱風と渦巻く爆発の余波とがかみあつて、ゴウ〳〵と唸つているではないか。その時私は初めて我に返り、諸所方々から聞える助を求める人達の声、子を、親を、兄弟を呼び求める悲愴な声を耳にした。

本館入口前の築山に、二、三人の人を見付けて私は走り出した。

レントゲン科の永井助教授、久松婦長、椿山看護婦、友清技手、角尾内科大倉副手等である。永井助教授は負傷されたらしく、コメカミの附近から血が流れている。それをうす汚れた布で、巻いて居られた。そして私を見てニツコリされ、「怪我はないか」と聞かれた。私は全く無傷であると答えた。そして、皆でお互いの無傷を喜び合つた。

その間にも、あちこちから、元気な者、一人で杖をついて歩いて行く者、怪我人を背負つている者、歩けなくなつて這つている者、果ては、精根もつきはて〻倒れている者、全ての人が、何かにつかれた様に、無表情であり、無言である。私は永井助教授の指示で留まつて、患者搬出に全力を挙げることになり、何時又空襲されるかも判らないので対空監視を命ぜられ、堤と共に、内科に引き返し屋上に駈け上つた。

やつと渦巻くゴミの様なものはへつたのであろう。薄明るくなつた様であつたが、異様な大地へ吸い込む様な渦巻と、大つぶの雨みたいなものとは依然として変りなかつた。

私は時々下で懸命に患者搬出に駈けまわつている人々へ、異状のないことを連絡しつゝ、対空監視に当つた。

基礎教室は、全くその影を認めないまでにおしつぶされ、只、病院の外廓だけが、無残な残骸となつて白つぽく旋風の中にさらけ出されている。

高南病棟東側に聳えていた煙突も、真中附近から南へ折れ曲つてしまい、その下の汽缶室は屋根をはがれてしまつて鉄骨だけが残つている。

ふり返つて城山・山里・岩川町等の浦上一帯は一面火の海と化しつゝあつた。やがて病院も南講堂附近から火がついて次第に燃え広がる様である。

大体〇時三十分か一時頃だと思う、火の広がるのを見て、私は、本館前の救護隊に引き返すことにした。その時、筬島助教授が患者を背負つて救護に懸命なのに会つたが、お互に無言で目礼しただけであつた。筬島助教授も御元気の様であつた。私も岩永看護婦、藤永看護婦を助け乍ら薬局の壁をのり越えて玄関へ出た。その時は、火も大部まわり、患者の搬出も困難な状況と判断された。

一応玄関前に搬出した負傷者を、今度は病院裏の丘へ夫々かつぎあげることにした。

最初、山王神社境内へと夫々動き出したのであるが、此処も火がまわつて危険状態になつたので引き返し、結局全ての負傷者は裏山へかつぎあげられた。

木という木は殆んど吹き倒され、芋畠の芋の葉は高熱を浴び、しなびてしまつている。到る所に負傷者や死亡者が、三々五々と折重なる様にして水を求めている。

吾々は、水を与えるべく探したが、本館前の水槽にボーフラのわいた水を探し当てることが出来たにすぎなかつた。止むを得ず、その水面をたゝきボーフラの沈んだ後の水を鉄カブト等に汲み、配つたのである。

角尾学長も丘の中腹に負傷の身を横たえて居られ調教授、永井助教授、大倉先生、前田婦長がつきそつて居られた。

椿山看護婦や、友清技手、それに小林、堤の級友と共に、水を汲んでは負傷者の間を駈けまわつた。

一方私は、学長の健在を皆にしらすと同時に、皆の志気を鼓舞しようと思い、畳二枚分位の白布で血染の日章旗を作り、それを丘の中腹―学長のねて居られる位置に立てた。そして、元気な仂ける者は、日章旗の下に集るよう永井助教授と共に声をからして叫び続けた。

その間にも夫々負傷者を背負つたり、肩を組み合つたりした幾組もの列が、金比羅山を越えて避難して行つた。

午後四時頃私と級友小林は、負傷者の今夜の食事を県本部に依頼する為に出発した。勿論、街中火の海なので、山を越え、立山町にある県本部防空壕へとひた走りに走つた。途中で数えきれない位の死傷者を追い越し乍ら、元気を出して下さいと叫びつゝ走つた。咽をからすと、附近の畠にとびこんで胡瓜をかじつた。

県本部では私が医大から連絡員として参謀室にいたことがあつたので、溝越課長（現市選管委員長）にお会いして、医大の状況を報告し、五百人分の食糧をお願いした。その結果カンパン五百人分を頂き警官の応援を得て医大へ引返した。

五時頃からカンパンを配布して廻つた。

又、調教授は穴弘法のお寺で握り飯を作り之を配布して廻つて居られた。

その頃は病院も、殆んど火の海と化してしまつていた。永井助教授の下に集つた医員学生看護婦は、夜の準備に小屋を作つたり、鉄カブトで小さな芋やカボチャを久松婦長がもつていた塩を入れたりした。一通り食物の配布を終つた者達が集つて来たのは日も暮れてしまつてからで

あつた。

暗闇の中に大つぶの雨が落ちる中で、畠の縁等に腰を下したり、転んだりして、塩炊きの芋やカボチヤを食べた。そして、皆の耳にひゞけと、私達は永井助教授の音頭で、「海行かば」と「御民われ」とを泪にむせ乍ら、その泪に負けまいとして声を限りに歌いつゞけた。その間もあちこちで、友を、師を呼ぶ声は、悲しく、暗闇の中をこだましていた。

私達が居る所から五十米位の山かげに、石崎助教授が殆んど全身火傷されて寝て居られた。永井助教授は自分の傷も忘れた様に、甲斐々々しく看病されていた。

私は級友の小林・堤・田島と共に、夫々の科に別れた他の級友のことなどを話し合つた。

浜崎は大腿骨折で、附近にいる様であり、野上も負傷しているが元気の様であつた。

麻生・朝倉・伊藤・有富等は精神科であつたが、此のグループは殆ど駄目らしい。

深山は高木に背負われて山を上つて行くのを見たというものがいたので、大丈夫らしかつた（後に二人共に死亡したことがわかつた）。

此の様子では、半分大丈夫だろうかと懸念された。

時々稲妻のような閃光が道の尾方面で上るのを見て、まだ油断がならない。皆疲れているのだが、眠れないのであろう、ゴロ〳〵と転がりまわつていた。

此の様にして、夢の様な、又夢でない様な、恐怖の一夜は裏の金比羅山から明けて行つた。

火の海は一夜の中に、何物も残さず、焼きつくしてしまい、只、方々から紫白の煙が、幾筋も真直に上つているだけである。静かである。無気味な程に静かであるが、陽光の中に元気な者も、負傷者も、夫々動き始めた。

角尾学長、山根教授、高木教授は高南病棟下の防空壕内へ移され、調教授により手当が施された。然し、一寸の物音にも、山根教授、高木教授は痙攣を起される状態で危険であつた。

吾々は調外科を整備して、そこへ大学関係の医員・学生・看護婦等の負傷者を搬入した。私の記憶では、調外科の此の部屋に搬入されたのは次の人々である。

級友では、麻生が頭部に約十五糎位の切創を受け而も既に半狂乱の状態で、あわれにも、一糸まとわず転々として転げ廻つていた。「麻生」と呼びかけると「オー」と異様な返事をする。彼は終戦と同時に昇天した。一級下の永井も居た。何の外傷も認められなかつたが、彼も終戦前日に昇天して行つた。

医員では、村上先生、平野さん（医専先輩）が記憶にある。村上先生は終戦も知らず、奥さんの名前を呼び乍ら、さも奥さんが側に居られる様な話し振りで、子供は頼むと云いつゝ昇天された。

看護婦では堀江、正味、田島、西下、岩永、藤永、小児科の給仕さん等が記憶にある。

其の日、薬専の防空壕に午後行つたのであるが、壕内には水がたまり其の中に薬専の生徒は、殆ど全部が火傷を受けてしんぎんしていた。此の人々も殆ど調外科へ運んだ。担架も急造のものであつたが、大分役に

立つた。

医専二年、一年は夫々生理学教室、解剖学教室で机についたまゝ、受講中のまゝの位置で、無残にも骨と化してしまつていた。

恐らく受講中に、非常な圧力と高熱とによつて一度に木造の講堂は圧しつぶされ、逃れることも出来ず、夏の乾燥しきつた材木は一度に火となつてしまつたものなのであろう。

今更の如く新型爆弾の威力に驚歎すると共に其の使用を呪うものである。

当時三年

洋ちやん

首藤さく

洋ちやん。あれから十年。きのう今日と思つていましたのに、泣き〳〵重ねる八月九日、十年もの歳月がたちました。でも母さんは、やはり昨日、今日の様な気がします。

町を歩いていても、後姿のよく似た人を見ると、もしやと思い急ぎ追越してみれば、ぜん〳〵違う人、何度がつかりした事でしよう。あなた位の人を見ては道を歩きながら泣きました。あれから母さんは泣き虫です。もう三十才になりますね。健在ならば子供の一人や二人はあつてもいゝ年頃ですね。昨日、慰霊碑の中にそつとしのばせた花嫁人形さんの写真を見て下さいましたか。裏にかいてあるお手紙もね。

今年一月やつとの思いでお前のなつかしいふる里、盛岡山にあなたのお墓を建てましたのよ。其の時、学校より戴いたお骨と、中学時代のお習字と共に埋葬した花嫁人形さんの写真です。生前、はにかみやさんのお前にしかられるとは思つたのです。こんな事で一瞬にして悲しい事になり、おろかな母の願いかもしれませんが、来世は長い〳〵寿命をもつてきて、こんなお人形さんみたいな人と幸せに暮して貰いたい一心です。母さんの意のあるところを汲んで手を差延べて受取つて下さいね。

色々とお前の幼い時の思い出にふけりながら、本当に気だての優しい母さん自慢の子でしたのに等と、又十二年前入試受験に来たとき安否を気づかいながら、宿で待つていた時の事等々思い出はつきぬ。「母さん、出来たよ〳〵」とにつこりと得意になつて帰つた時の事がまざ〳〵と瞼に浮ぶ。

あゝ追憶にふけりながら、只涙のみ流れる。

今年は十年祭。山河遠くはなれていれば母さんも年をとつて、参拝も出来なくなるので悲しいけれど……最後の魂と心の対面に参りました。昨日は終日思出の校庭を、お前と歩いた道を逍遥しました。文化会館で当時の惨状をみてこのむごたらしさ、母さんの憤り、腹立しさ、誰に訴えんすべもなく泣くより外は……

あなた達の大きな犠牲によつて戦争は終つたとは云え母さんは終生忘れる事は出来ません。再びこんな残酷な事を繰りかえさない様に祈るのみです。

洋ちやん!!今迄は又来るよと云つて帰りましたが、これからは参拝は

出来ませんが、心はとんで参ります。
洋三さん、安らかにお友達の方々といつしよに御瞑目して下さい。
さらば洋ちやん、思い出の長崎を泣きながらあとに、只々冥福を祈るのみ。

故首藤洋三　　当時二年

原子爆弾

村田四郎

また恨めしいあの日が近づきました。今年も、定めて皆様御集いの事と察します。去年の今日は居られた人の中にも缺げたお方もあるでしよう。死ぬるまでに今一度長崎に参りたい様な気も致しますが、私には再び長崎を見るだけの勇気はありません。
せめて此の一書を御集いの皆様へも御披露して頂けば此の上もない供養です。

年経なば忘れやせんと思ひしに
老の涙のかわく日もなし

『安らかに眠つて下さい。過ちは繰返しませぬから』
これは広島に建つた原爆碑の文辞です。原爆に関わりのない心なき人によつて書かれた文句だと思つて、私は当時憤慨抗議した事でした。
所で、最近御地の絵葉書を入手致しました。
『原子爆弾落下中心之標』
何と言う表現でしよう。私は重ねて驚きました。
何でハツキリと『米軍第二回原子爆弾投下中心地標』と書かれないのでしよう。日本軍閥の迷夢を破る為には広島の原爆は止むを得なかつたとも言えます。然し、然し、其の反響をも待たず旬日ならずして、長崎へ投下した事は天人倶に許さざる行為です。長崎の方々は如何に解して居られるのですか。
『其の罪を憎んで、其の人を憎まず』
こんな人類を欺瞞した聖語?を尊重すればこそ、此の世に犯罪がたえぬのです。若し、この語が成立するならば他人に恩を受けても
『其の愛を感謝して、其の人に感謝せず』
報恩の思想がなくなるのも当然です。
無条件降服によつて前非を悔いる国民を戦後十年猶戦犯として抑留する相手に何の遠慮が要るでしう。書き改めるべく運動して下さい。

逆縁の人にしあらで誰れが知る
今日の恨みをこの悲しみを
綿々として追憶はつきません。

故村田由之　　当時二年

思い出

川上クニ

子供が小学四年生の時主人が亡くなり、其の後は親一人子一人にて、とても親思いの子で御座いました。

一番忘れられぬのは合格の発表が新聞に出た時、私の体に飛びついて親子共に喜んだ事、それにあの角帽が又嬉しくてあの喜び方、大変で御座いました。

長崎に行く時に私に向つて、お母さんーお父さんは死んでいないけど何一つ不自由もなく自分の思う学校に行かしてくれたのでいつ死んでも思い残す事はないと、私に感謝して行つた言葉は永久に忘れられません。

八月十三日に長崎に行き、あの広い〳〵校舎の焼跡に、我が子をさがし求めてあるいたあの時の気持ちは、言葉には云い表わす事は出来ません。

只今は一人ボツチで淋しい日を送るにつけ子供の事ばかりです。今の様に病気中は尚更、思い出しては涙ばかりです。

故川上　允　　当時一年

昭和二年三月九日生　昭和十九年筑紫中学校卒業

弘治の思い出

調来助

『コージー』、『弘ー治ー』、私の呼声が穴弘法の丘にこだまして、高らかにひびきわたつたが、耳に入るのはあたりの騒音だけで、何処からも何の応答もない。丘を越え谷を渡つて隈なくさがし廻つたが、見る顔は弘治の学友か、みじめな姿をした看護婦達ばかり。たしかに基礎の教室で聴講中だつた筈だから、逃げたとすればこの丘か天主堂裏に違いないが、或いは元気に滑石までたどりついたのかも知れないと、はかない望みを頼りにして、またもとの丘に引き返した。

昼間に治療してやつた永井助教授と枕を並べて一夜をあかし、角尾学長はじめ丘で野宿した負傷者達を病院の焼跡に運んで、念のため今一度基礎教室の跡からグラウンドまで一巡した私は、十日の午後疎開先の安否をたずねるべく、徒歩で滑石に向つた。途中で十八銀行の和田氏から、二人の男の児の中一人は帰宅したが、今一人が未だ帰らない由を聞き、どちらが帰らないのかと打ち沈みながら道を急いで我家にたどりついた時、それが弘治であることが判つた。

其後は負傷者達の治療で、弘治の行方を探す暇もなく、近所の人たちから『少し心当りを尋ねてみましようか』と親切に云われた時も、『若し生きていれば何処かで手厚い治療を受けているでしようから』とお断りして、十数日を目のまわる程の多忙の中に過した。学生達が心配して、長崎市内は勿論、諫早、大村までも色々探索して呉れたが、背中に火傷

を受けて帰宅した長男の精一が、訳も判らず死んで行つた十六日にも、角尾学長が滑石大神宮の拝殿で他界された二十二日頃になつても、風の便りにさえ弘治の名を聞くことは出来なかつた。

原爆直後の混乱が一片ついた八月二十八日、私は家族（家内と女児三人）をつれて基礎の焼跡に弘治の骨拾いに出かけた。たしか当日は解剖学講義の最中だつたと云うので、腐肉をあさつている烏の群を追いはらいつつ講堂に行つてみた。立派だつた昔の階段講堂は見る影もなく、ただ台石だけが無残に残つて、所どころに白骨の山がうず高く築かれいた。恐らく崩壊した屋根の下敷きとなり、心細さに十数人づつ集つて焼け死んだためだろう。

私達は暫し呆然とこれをうち眺め、やがて涙を払いつつ各々の山から二つ三つ宛の白骨を拾つている時、突然講堂の中心部にあたる当りから『一寸来て御覧、ここに妙なものがあるよ』と惇子の呼ぶ声がした。すぐにかけつけた家内も『あツ、これは弘治の洋服だわ』と叫んだ。見ると、講堂の真中に倒れた金属製のドアに、黒ズボンの前の部分が長さ約十糎、巾約十五糎だけ焼け残つてこびりついている。裏の白布が上になつて、それに『山本』と云う字がはつきり墨で書かれていた。山本と云うのは私の姉の嫁いだ家の姓で、甥が九大医学部を卒業して海軍々医として応召したあと、弘治がその学生服を貰つて着ていたもので、当時国防色の洋服ばかりの中に、一人黒い服を着て得意になつていたものだ。家内は、これはきつと仏様のお引き合せだろうと喜んでいたが、私は、いつかひよつこり元気に帰つて来るかも知れないと思つていた空頼みが消えて、しばし悄然と焼布を手にして佇んでいた。

あれから十年、弘治は勿論永遠にあの元気な姿を見せては呉れない。今生きていれば今年満二十六歳十ケ月で、最早一かどの青年医学徒になつていることであろう。

故調　弘治　当時一年

昭和三年十月十五日生

昭和二十年三月　長崎県立瓊浦中学校修了

長崎医大原爆七周忌を省みて

関家花子

忘れも出来ぬ昭和二十年八月九日午前十一時二分は長崎の浦上を中心として原爆を受け数多の市民及び医科大学生八百五十余名の貴き命を一瞬にして灰と化した怨み深き日である。

長崎で戦禍を受けた事を知り、吾子の便りを今日か、明日かと鶴首して待てど通信は不通となり遂に手にする事が出来なかつた。

一ケ月位過ぎて、主人と、兄とで医大へ行く。広島に相次いでの被害にて残る物は、只白骨のみであつた。雅俊の友人庄司様に（一級上の二年生）教示され戦没場所へ行く。其の場所は第一解剖学教室と、第二解剖学教室との間にある解剖学講堂で、国友名誉教授の居られた建物の西側の木造建築に居たので、殆んど即死だつたとの事。

雅俊は第一小隊の第四分隊長をしていたので座席が特に分り易くその

あたりにて遺骨を拾つて帰つた。

昭和二十六年八月五日午後一時より医大では大音寺にて盛大な慰霊祭を執行される旨の招待を受けた。松山の伊賀久子様、主人、それに私も加つて三人で出席しました。祭壇には原爆犠牲者の霊を迎え殊の外厳粛である。鮮かな供華を生け、「医科大学殉没者八百五十余名の霊」と記された位牌が祭られていて読経の声は粛々として、本堂に集つた遺族は不動の姿勢で悲しいものが漂つていた。昔から大和魂をもつて敗戦の憂目を知らなかつた日本も、原爆にあつてはどうにもならなかつた。

天皇陛下には再度の原爆を御心配遊ばされ、遥かに、人民の身辺を御心痛になられ、「朕の一身如何あろうとも国民の斃れるを見るに忍びず、赤子地にひれ伏して深謝せよ」。(昭和二十年八月十六日大阪新聞より)と御前会議に賜つた御言葉にて、ついに降伏に至つたのである。終戦の犠牲者であり、同時に平和再建の柱となられた貴い霊前にて、新たに袖絞る父母の誓いこそ只々平和再建、長崎医大復興に他ならないのである。

供養一時間半、慰霊祭終了二時五十分。其の後、遺族の先生方と懇談致し、当時のお話し等承り同情し慰めあう。

若原助教授に案内され、医大の焼跡へ行く。気味悪いばかり、漠々たる荒原は、静として私達を迎えた。彼方、此方には元の鉄筋建が籠の様になつて残り、在りし日を物語つている様だつた。

先ずグビロが丘の墓地へいつてお参りする。

碑には「慰霊碑」と刻まれ、

八百五十余名のわが師わが友

平和の先駆者としてこの丘に散りたまひぬ

おもふ事みな遥かなりこの丘の

裾のべにしてミサの鐘鳴る　　星葉

と、お心をこめられた先生のお歌が刻んである。又、後には生き残つた友達が小刀で、「友、此処に眠る」と刻んだ石が横たわつていた。

自分はあまりの淋しさに、「夕陽の霊碑赤くそむる時いずくともなくきりぎりす啼く」と、一首詠んだ。感慨無量にて、しばらく冥想に耽る。

其後、毎年八月九日には遠路ではあるが、つとめてお参りする事を楽しみにしている。如何に科学が進歩したとはいえ人類を滅亡して如何なる世界が生れるのであろうか。現在原水爆禁止運動が盛んに行われている。

(松山市御幸町一四五在住)

おもうこと

関家貴美子

〃光〃　〃ひかり〃　〃光〃

光栄に輝いて居るすき透つた水晶玉のようだ。太陽の光が、浦上の夏草に、家々の屋根に反射していた昭和二十年八月九日十一時二分。

瞬間の光があつた。

みる〳〵地上に展がつて行つたものは何か!!余りにも突然に下界を荒れ狂わせ、うめき返らせて、そこには涙の余地も無い程残酷すぎる反応

を残して飛行機は去つた。

あれから十年……

グビロが丘の記念碑の辺りには同じように夏草が茂つている……

松山の地に警戒警報が時々ある頃、群青色の空に謎のように浮いていた雲を見て、素早く、「怪しい、早く隠れろ」と言つた眼がはつきりと残つている。

「犬死はしたくない」と死ぬる数日前に書いて寄こし、謎の様に浮いていた雲に敏感だつた兄が謎のように死んでいつたのだ。

海を隔てた長崎の地から「人間の体はとても複雑であり、なか〳〵うまく出来てるものだ」と、解剖学講義を受けた日の喜びを細々と記して来た。その解剖教室辺りで、くねり合つた鉄や、巨大な石、材木に覆われ、遁れる術なく死を決意した学生達が、〝海ゆかば〟〝君が代〟の大合唱をしながら襲い来る烈火の中に消えていつた記事を読んだ時は自ら頭がさがつた。

キサミ、ゴータミの言葉に「生きものは死ぬるものだ」とある様に確かに死ぬるのである。けれども、大きな対象をもつていた若人の生命が、余りにもむごたらしく圧しつぶされて了つた後には未来などもう何処にも無いのだ。多くの若人の死に対して「生きものは死ぬるものだ」の言葉を噛みしめながら心中には尚、押えがたいものが右往左往しているのである。

兄が出発の際、何か言い交したいまゝに別れた。どんな言葉か？確かに「健康に留意する様に」とは言つた。二番目に言う事は、これだとも、あの言葉だ〃とも、はつきり分らない。唯不透明なまゝに……最後に

「もう忘れ物は無いか」も言い得ず、総べてが静止しているかと思われる午後の薄い陽ざしの中に立ち去つた。リュツクサツクを背負い、トランクを持つて弾んだ歩調で長崎に向つた後姿が浮んで来る。死ぬなんて誰も思つてなかつたのに、今年盆燈籠には黒い筆で、十回忌と記すのである。……

一昨年だつたと想う。久々に墓参りを終え夕焼の彩に染つた山寺の石段をゆつくりと降りた前は、共同墓地になつており、その内の未だ新しい墓表に「復活」の字をみつけた。地上に姿はないけれども、この世に生きている我々と別な境地に活きているのである。

〝終戦〟〝敗けた〟の言葉は人間を気抜け状態にしてしまつた。全国民の必勝の夢も信念も、無茶苦茶になり、一体何に向つて歩を進めるのか、まるで夢遊病者のようになつた。世の中は、ぐらつき、なげやりと、不安の充満となり、日々の流れに無抵抗に流れ、漸く落着きを取りもどした今、平和の言葉をふり撒きながら、原水爆の密談は何処かで脈打ちつゝ形成されているのである。人類の滅亡、否地球滅亡と脅かし合つているのは人間である。

世界平和の犠牲となつた原爆死の人々を想い、みんなが、原水爆の恐ろしさを識り真心から世界の平和に手を取り合うことを願うのである。

合　掌

原爆にて死にたる兄の写真ブツク開けば余白が淋しく目にしむ

再びは姿まみゆる術もなき境を隔てし兄の顕ち来る

夕映に応うる如き反射有りて彼岸中日の墓に参り来ぬ

密度増し我に去来する様々を瞳の位置を定めて想う

〝ふるさと〟は亡兄の好みし歌にして何時か二重唱に変りて居りぬ

故関家雅俊　当時一年

大正十五年四月二日生

昭和十九年三月　県立松山中学校卒業

あの日の思い出

隆杉正孝

有史以来、残虐無比の原子爆弾が浦上の上空に炸裂したのはつい近頃のように思いますが、隙行く駒に関守なく早や十年の昔となりました。

あの非人道な兇弾の犠牲となつて、一片の白骨と化した肉親の遺族として、一日も忘れることが出来ないのでありますが、今日の記念日を迎えるに当りましてのかなしみは又一入で、当時の悲惨な光景が、まざ〳〵と瞼に浮び、胸がうづくのをとゞめる由もありません。

罹災の当日、夜ふけて猛火を冒し、又其の翌日は炎天の下、敵機を避けながら、死屍累々の焼野ケ原に我が子を捜し歩いた数日は、余りに災害が大きかつたのと、至る処罹災者で満ちて居たので、いわゆる放心状態となつたせいか、つらくもなく悲しくもありませんでした。

しかし日が経つにつれて、心の落付を取戻し、万感交々脳裡を去来して、夢なり難い夜が続きました。

雨につけ風につけ老妻のこぼす愚痴の繰言を、たしなめながら心の底では泣かずに居られぬ私でありました。

爾来年移り星変り原爆十周年の今日、篤志の方々の尽力で、グビロが丘に盛大な慰霊祭を営まれまして、老生もその末席に加わり諸精霊を弔い、御冥福を御祈り出来ましたことは、せめてもの心遣りでありました。

帰途、亡き子終焉の現場をおとない、ありし日をなつかしみ低徊去るに忍びず、腰折れを詠み、駄句をひねくつて、思わず時を移しました。

年毎に亡き子の思いやまさる
　原子兵器ののろはしきかな
夏草のしげみに鳴くや
　きりぎりす

故隆杉悟郎　当時一年

昭和三年九月二十五日生

昭和二十年三月　長崎県立長崎中学卒業

（長崎市矢ノ平町三一四在住）

茂

長谷コト

茂は五人の中の真中で一番成績が優秀で、大いに将来を期待して居りました。医学によりいくらかでもお国に尽させたかつたのでございました。

あの日私がもう戦争はいやになつた早く平和にならぬものかとなげき

ましたところ母たる人がそれではだめだ僕たちを励まし力づける役だろう、戦争はこれからだ必らず勝つと申し、元気でいつてまいります、帰つてから角帽を注文しようと申しながら出かけました。

登校してから三時間位して原爆投下。先生、友人共々に極楽まいりをいたしましたことでございましょう。

姉が角帽を買つて、仏前にお供えしたいと買いに行きましたが、どうしてもなく、うちも全焼いたしましたので、茂のものは何一つございません。

私は時折りグビロが丘の慰霊碑におまいりいたしますのが、せめてものなぐさめでございます。

戒名は、「願求院医学精茂居士」とお寺の方丈様がつけて下さいました。日夜礼拝するばかりでございます。

故長谷　茂　　当時一年

履歴書にかえて

待山嘉代

昭和二十年八月九日。あの日おそろしき原爆のため元気一ぱいで出かけました俊も、とう〳〵帰らぬ人となりました。

俊は県立長崎中学を卒え時節柄の事とて両親はもとより本人も地元の学校をのぞみ、七月一日長崎医専に入学致しました。

喜びもほんの束の間あの様な事となり、私共親として一生忘れる事も出来ません。

けれども宅一人ばかりの事でなく一家全滅の方や兄弟もろとも亡くなられた方を思いうかべ、殊に俊は昭和三年八月九日生れで丁度お誕生日に当りますので満十七才の短い一生だつたと思い、よく〳〵本人についた宿命だつたとあきらめております。

故待山　俊　　当時一年

昭和三年八月九日生

昭和二十年　長崎中学修了

習也のこと

村部やゑ

思い起すと十年前の八月九日、あの忌わしい長崎市に原爆落下の日は、一生忘れようとしても忘れる事は出来ません。

習也は大正十二年三月岡山市で生れ、主人の転任で広島に移り、生後五ケ月目に父を亡くすとゆう生れ乍らに不幸な子でありました。

その後すく〳〵と成長し、大村小学校、大村中学校を経て長崎医専に入学、長崎市より通学していましたが、病気の為め多少休み、食糧事情其の他もあり、大村に疎開し、当時医専の一年として大村より通学中でありました。親の口から申すと、親馬鹿と言われるかも知れませんが、

習也は真面目な研究心強く、且つ親思い姉兄思いの誠に申し分ない立派な子でありました。

今から考えますと、虫の知らせとも言うのか、京大に在学中の長男も四、五日前から帰省し、兄弟仲睦まじく語らう姿を見乍ら、この世に自分程幸福なものはないと思うほど又とない楽しい日々でありました。併し一夜明けた九日の朝、習也は登校前兄が帰れば休んで良いと申しておりましたが、長男はどうも帰りたくないというので、平常通りでかけましたが、一番列車が二時間延着のため、一旦帰宅し、三人で楽しい一時を過しました。その時長男は「一日位さぼれ」と言うのに、試験前だからとにつこり振り返り乍ら登校した姿は、眼前に今も髣髴と浮びますが、それがこの世の見おさめとは、神ならぬ身の知る由もありません。

十年後の今日も私と長男の眼前に浮び、胸に迫るもの切々たるものがあります。十一時二分頃、原爆は落下し、あの衝撃は大村の家もゆるがし、不安の念にかられ新型爆弾ではないかと思いましたが、その威力も知らず、自ら心に大丈夫と言い聞かせておりましたが、落ちつかずに迎えに出た駅頭は、この世の生地獄の様相を呈し、思うだに身の毛もよだつものがありました。徹宵駅頭に立ちつくし、一日長崎市の医大その他の收容先及び、各地の被爆者の收容先を五、六日逍遥しましたが、習也の面影はなく、その後も毎日風の音、木の葉の音にも耳を立て、習也の帰りをひたすら待ち暮しました。又私を慰める長男も、自分が九日に大村を発つていたら習也は死なずに良かつたのにと落胆し、男泣きに泣くのを見て、兄弟の情に泣かされました。

新学期の登校もあるので兄を京都に帰した後の習也亡き一人暮しの寂しさは形容できないものでした。その後医大より連絡があり、十一月に分骨を願い、亡主人と一緒に納骨を終りました。

世の中には戦争で親兄弟子供をなくし、孤独に泣く不幸な人もあり且つ私がめいると長男が、習也の死は自分の責のように苦しむのを見て、気をとりなおして暮す中に御蔭様にて長男も卒業、就職することが出来ました。現在は長男も嫁を貰い、嫁が良くしてくれ亡き習也の再来かとも考えられ、長男夫婦の許で習也並びに原爆罹災者の方々の冥福を、心から祈つて暮しております。

故朝長習也　当時一年
大正十二年三月生　大村中学校卒業

ミサの鐘鳴る

有富星葉

おもふ事みな遙かなりこの丘の
裾の辺にしてミサの鐘鳴る

故有富重康
（当時三年）

死亡者名簿（付属医学専門部）

(イ) 教授

小野直治　保野正之　松尾京哉

(ロ) 仮卒業生

青木伸夫　木田橋良道　清田和之

野村仲徳　樋渡俊夫

(ハ) 三年生

青木茂　浅倉多計久　浅田勝孝

浅田昇　麻生弘　足立幸男

有富重康　伊東国光　岩永達雄

大浦治　大島喜八郎　香月健

近藤金一　島田地香生　高木邦憲

高木恒信　高原繁巳　永見幸夫

芳賀久　深山隆　横手貞衛

李集鏞　渡辺雄三

(ニ) 二年生

間野千春　赤崎安孝　秋月栄

芦沢正徳　東輝男　荒牧貴敏

安楽芳照　井水信夫　池田博実

池之子肇　石井立夫　石塚充

石本和良　犬塚喬二　妹塚道俊

岩瀬充　江藤久国　大槻秀雄

沖勲　郭芳徽　金子幸雄

川床隆　河村万喜生　黒井啓

古賀敬賢　児玉正嘉　佐藤直方

下崎俊水　首藤洋三　田中精

田辺清隆　高橋茂　玉崎昭宏

武内健　土岐宗次　中尾武人

中島正武　永井保

岩永千引　小出石行夫　大野明

落合潔水　梶原辰巳　兼氏一郎

川野正章　木元又男　鍬先清四郎

古森泰而　坂本博之　謝遜英

菅原三善　田中秀雄　高永宏

高橋二郎　塚本孝允　富永誠之

中島之彦　中山喜昭　永島順三

臼坂俊行　大谷豊治　岡本陽一

片伯部勇　亀井宏　賀来潮

河添正行　倉本武　小島惇一

児玉進　佐藤恕一　里崎永二郎

生島一夫　鈴木一男　田中祥生

高橋清　高平伸吾　竹浜吉和

竹下正七　寺田重治　朝長和夫

中島静雄　永井正一　永田信夫

並木輝夫　成松英明　仁志川禎一

西田豊　昇昭二　畑原睦夫

原浩巳　樋口匠一　深堀進

福田彰一　福田博之　藤川繁文

本多四郎　前川泰成　益田良和

松尾宏　松岡登　松元武紀

三宅治信　村田玄英　村田由之

森猛　森村哲行　横田健

林栄主　和田弘行　渡辺正守

(六)一年生

阿部琢磨　青木昭三　秋口明海

秋吉敏郎　浅田典昭　荒木寛一

安藤俊光　井上政治　井田成事

池崎雅裕　磯永利夫　出田昭二郎

犬塚彦夫　今村義徳　岩田昭夫

岩永功　岩永八洲　岩永要範

上村輝人　梅木敏郎　浦上康則

浦川幸弘　蛯原守　尾崎雅男

大久保彰　大楠泰正　大隈亨

太田和男　奥野昭　甲斐靖敏

片岡哲夫　片野哲男　角川肇

金尾敏也　兼信光世　蒲原静男

川上允　川崎勝次郎　川頭琢磨

川原俊吾　木村重彦　草野家通　小玉雅昭　相良和雄　重松肇　柴田勝三　嶋田博之　白石仁　杉山克巳　田川昭義　田中清視　多田正幸　高月博　滝川益一　鶴武俊　土橋直行　轟木汎　中尾泰三　中村正明　永田嘉瑞　西村昭治　野田武光

河野明　北野陽一　草野祐次　小森巌　相良弘道　篠崎兵衛　柴田正人　嶋村治　調弘治　関家雅俊　田代正　田本利道　隆杉悟郎　高比良公昭　竹原豊　哲翁元寿　東内正雄　飛永唯三　中島欣一　中山昭之　長谷茂　西村弘　長谷川脩

木戸将之　北村昌臣　桑原真司　古味房雄　崎永哲男　篠原昇　渋谷隆資　下垣弘知　杉本勝成　摂津定昭　田尻達郎　田吉正英　高崎惇佑　高比良房男　立石希男　土橋弘基　時沢大郎　朝長習也　中島禎三　中山三郎　西大雲　野口陽一　橋本良平

浜口恭三　浜崎菅男　林田新太郎
原　襄　日高康隆　久松鶴市
秀島克巳　平山勝康　平山真之
平山　貢　深江寛男　福田武麿
藤田正義　藤原元輔　藤本栄治
古田弘久　馬島孝徳　前川茂樹
前田信也　松鵜　璋　松田藤祐
松永久一　松本亀人　松山常雄
待山　俊　丸田脩造　三浦修造
三重俊夫　三島清和　三宅紀男
水田　肇　溝口　渉　光岡喜一郎
光永応美　峰　寛　宮本幸弘
牟田五十夫　室園重義　森　敏之
森尾勝磨　森山晃二　山口明次
山崎邦雄　山崎寿治　山下　繁
山下正之　山下嘉計　山之内正信
山領正夫　吉岡　董　吉田和郎
吉野　克　吉村竜男　米　精一
力武豊和　和田　弘　若杉　正
渡辺陽一

この中で日本名を名乗っていた台湾人学生とその本名

学年	日本名	台湾名
仮卒業生	野村仲徳	劉有徳
三年生	高原繁巳	范秉挙
一年生	永田嘉瑞	劉嘉瑞

この中に二十年八月一日の爆弾で爆死した者が三名いる

学年	日本名	台湾名
三年生	永見幸夫	
二年生	犬野　明	益田良和